

昭和45年2月1日 第3種郵便物認可  
平成20年12月1日発行（毎月一回）日発行  
俳句雑誌 沖 第29巻第12号



俳句雑誌[おき]

12  
月号

沖  
発行所

# 夜語り

能村 研三

## 雨なら雨を

蠟 涙 を 貯 め て 夜 語 り 絶 頂 に

筒 上 げ の 轆 轤 の 土 や 秋 気 澄 む

縄 文 の 野 に 大 ぶ り の 出 落 栗

\*でおちぐり||自然に落ちた栗をさす「優嵐歳時記」より

ハンモック 鬱 気 を は ら む 撓 り と も

温め酒雨なら雨を褒めてをり

句集『磁気』にある私の一句である。

今年の勉強会は、銚子の犬吠埼で開催されたが、一日目の吟行では雨混じりの天候になった。特に吟行バスで海難碑が建つ「千人塚」を訪ねた時は、傘をさしての記念撮影となった。

例年勉強会の開会の挨拶は、まず「冲晴れ」であることをたたえて始まる。先師の時代は、「冲晴れ」「登四郎晴れ」とも言われ、先師の強運な神通力をもって、「冲」の催し事がある日は晴れをもたらすという伝説があった。

今回の設営を担当した幹事の菅谷たけしさんは、勉強会の冒頭の挨拶の中でも、この日の雨をくやんで、まるで自分の責任であるかのように挨拶されたが、雨に降られたことは私たちにとってそんなに残念なことではなかった。

俳人のすばらしいところは、どん

湖波に手を浸しをり月今宵

月の道適ふ身幅の小島かな

神渡し進学塾の万祝旗

「鳴」五百号

鳴立つは青年白潮とこしなへ

楓種に「鳴の星」の名もみじせり

一斉に「当年子鳴」の飛び立てり

な天候であろうとも適応できる力をもっていることである。

以前、曼珠沙華の一番の咲き頃を狙って吟行会を設定したが、その年は天候が不順で、一つも咲いていなかった。しかし、そんな状況にあっても、花が咲いていなければ、それはそれで、別の視点で俳句を作れるのである。

今回も、小春日和の穏やかな海の景色を思い描いていたかも知れないが、雨にけふる暗い海もまた俳人にとっては格好の材料であったのである。いずれ勉強会での作品は「沖」に発表されることになるが、その作品の一つ一つを見れば、それが証明されるはずである。

能村 研三



# 至福の朝

林 翔

## 私の出世作

登四郎第三句集『枯野の沖』が出版されたのは昭和45年6月であったが、翔第一句集『和紙』が出版されたのは同年10月であった。書名は昭和39年作の

秋風の和紙の軽さを身にも欲しによる。

「沖」第1巻第3号（昭和45年12月号）は『和紙』特集として編まれた。俳壇からは加畑吉男氏、「沖」からは久保田博氏が、それぞれ4頁の書評を書いている。

また、「和紙15句選」を俳壇の七氏に依頼したが、句集の劈頭句、今日も干す昨日の色の唐辛子を七氏中の六氏が選んでいた。

当時の私は縦書大学ノートを「推敲帖」と名付けて、一頁に三句しか書かず、余白を推敲に宛てていた。当時の推敲帖を見ると、この句にも相当、推敲の跡がある。

余談だが、当時「馬酔木」の編集に当たっていたのは木津柳芽氏であった。江東馬酔木会が秋櫻子先生を網舟に招待した時、波郷氏・柳芽氏も共に招かれていた。丁度「馬酔

好晴や撈ぎてたもれと柿たわわ

木守柿といふには数のやや多き

小気味よく紅葉揺らしつ急行車

登り窯に沿ふ徑なべて草紅葉

窓 黄葉 至 福の朝 となり けり

明日は 散る 庭 紅葉 かと 眺む の み

落 栗 や 庭 に 栗 の 木 な き も の を

影 薄 し と は 言 ふ ま じ く 秋 曇

旧 友 の 死 に 身 を 思 ふ 寒 露 か な

風 も 無 き 空 ゆ れ わ た る 鶉 の 声

木集」の締切直後だったので、柳芽氏は目ぼしい投句を若干携行したらしい。「今月はこないいい句がありました。」と言って、唐辛子の句を筆頭に置いた翔の投句を先生に見せた。先生もうなづき、覗き込んだ波郷氏も「うん、いい句だ。」と言った由。同船していた江東馬酔木会の会員、宮城二郎氏が、翌日早速、市川の拙宅まで報せに来てくれた。そんなに評判になったのなら、

きつと成績が上がるだろうと期待していた。「馬酔木」が届いた時、急いで披見すると、四句入選で巻頭から、三席目であった。こうして、この唐辛子の句が、私の出世作となったのであった。

## 林 翔



# 蒼茫集



唐辛子

松本圭司

未知

辻直美

唐辛子赤さが辛さ主張せり  
進化することが人にも草は実に  
波立つを忘れてをりぬ秋の海  
黒潮の潮目さだかに鷹渡る  
足跡がなぎさに釣瓶落しかな  
地球てふ星から星を見る良夜

さんずい偏

酒本八重

門扉なき王廟月の影さしぬ  
秋麗の領巾振り丘と名付けたし  
回想が回想を呼ぶ虫の秋  
よく使ふさんずい偏や水澄めり  
「位置について」秋天へどーん  
梟や明日のために素読して

みちのくの千の草木に万の露  
水澄むや手ずれの賢治初版本  
表面張力月光を零しけり  
繕うて蜘蛛の働く月夜かな  
合鍵を持つ人のなき白露かな  
冬用意素粒子といふ未知もあり

曼珠沙華

吉田陽代

火の色しか持たぬ一途や曼珠沙華  
図書館の坂のぼりきる葛の花  
箒草干され箒の身ごなしに  
身をかくす術なく芭蕉破れけり  
どことなく心かたむけ鉦叩

千年忌 上谷昌憲

種茄子や光源氏は千年忌  
覚えなき肘の擦傷厄日過ぐ  
内濠派外濠派鴨来たりけり  
傘立に花柄の杖敬老日  
逆光をふりはらひつつばつたとぶ

金木犀 安居正浩

金木犀散り敷くといふ見せ場あり  
半角でコスモスと打つ揺れてゐる  
まだ歩くつもり荒地野菊かな  
畦に添ひ水音にそひ曼珠沙華  
青栗の風に揺られて重くなる  
一日を裏返したる野分かな

生き字引 佐山文子

一灯であれやこれやと為す夜長

生き字引の老人に躡く茸狩  
ななかまど真ん中に据ゑ山締る  
おだやかに晴れて全山うすもみぢ

服薬の数 吉田政江

実石榴や男の弱き時代とも  
服薬の数おそろしき虫の闇  
救急車虫の闇へと消えにけり  
隠蔽色とうに剥がれて穴まどひ  
青池の壺形かこみ山毛櫨紅葉

おほあたま 辻美奈子

陣痛を重ねて水の澄みゆけり  
湯婆に羊水ほどの熱のこる  
絶滅危俱種のひとつに月の兎かな  
蓑虫の思ひもよらぬおほあたま  
引き算に一借りてきし小六月  
曼珠沙華潮引くごとく終りけり

# 潮鳴集



生真面目

宮内とし子

母性とは志功の菩薩露けしや  
長き夜の文士の宿に文士の書  
箸置に箸休ませて虫しぐれ  
曼珠沙華島の子の声よく通り  
生真面目な部屋となりたる障子貼

身に入む

鈴掛

穂

蝸の呼び合うて野を広げけり  
息長き風が波追ふ真葛原  
太陽の老いたるかたち曼珠沙華  
身に入むや宰相になき立志伝  
蜻蛉の群れてひかりを乱しをり

小 道

菊地光子

ペン先にインクの小道秋ともし  
青空や歌ふ口して蕉釣らる  
曼珠沙華さみしきときは寄り添うて  
煮かへして眼鏡くもらす秋の暮

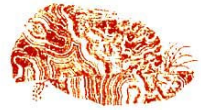
夢二の世

高橋あさの

夢二の世の半衿かとも杜鵑草  
こそばゆく鶏頭に風来てみたり  
惑ひなきいろに澄みたる実紫  
捨て舟に水溜りゐる十三夜  
ご飯ふく湯気のおまさも冬隣



# 沖作品



## 能村研三選

行く雲や大につながる花野道

千葉

峰

幸子

待宵や産めよ増やせの世を生きて

舟小屋の太き錠前秋深む

色変へぬ松や表札女人のみ

夕映の雲の百態雁渡る

新涼の蟹のさ走る砂紋かな

鯛桶百浜びとの力瘤

桃むいて夕映の空やはらかし

虫の音の一途に星のきららなり

鳥渡る明石正午の時計台

波消しに波立ち二百十日かな

豊年や老宮守の禪掛け

無患子を教へて僧の去りにけり

朝顔の澆刺と来る手摺かな

実石榴を割れば百鬼の目玉あり

市川市

宮島

宏子

東京

齊藤

實

神主に腹帯あづけ天高し

直立に並ぶギターや賢治の忌

岩田帯して背筋伸ぶ秋の風

柿熟るる長嶋が去り王が去り

マタニティーブルー焚火に手を翳し

十三夜全島石油備蓄基地

一塊の石も仏や足月夜

通勤へ拭ふサドルの朝の露

大花野思考回路のぷつつんと

巻き戻し効かぬ日々あり林檎剥く

不意にやんま人を怖れずすれ違ふ

雁渡る瑠瑯の空くきと折れ

水平に飛ぶ水切りの石秋うらら

白木槿いまは指折るほどの数

花すすき手折り山風持ち歩く

福岡

小林 奈穂

市川市

くらたけん

北海道

梶川智恵子

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

色変へぬ松や表札女人のみ 峰 幸子

門柱に掲げる表札、苗字だけの家もあるが、フルネームでその家の主の名前が書かれるのが普通だ。ただ、女性の一人暮らしであったりすると、表札を掲げるにもやや躊躇することもあろう。しかし、この句では、女性の名前だけが書かれている表札がかかっていた。門構えに松の木があるのであるから相当なお屋敷であるのだろう。

鯛桶百浜びとの力瘤 宮島 宏子

この句を読んで、青木繁の「海の幸」という絵画を思い浮かべた。館山の布良海岸で漁師たちの動きを描いたものだが、この句も鯛がよく獲れる千葉県が舞台なのだろう。鯛の大群が群れをなして海岸近くに殺到、九十九里浜は大漁に沸いた。地引網で収穫された鯛を浜人はせつせと桶に入れて魚市場に運んだ。大漁の喜びもあつて浜人は明るく元気でたくましくも見えた。

実石榴を割れば百鬼の目玉あり 齊藤 實

石榴というと鬼子母神の伝説が思い出される。わが子可愛きの余り子どもを奪い喰らい続けてきたが、仏陀に諭され改心する。この時「子を喰らう代わりに」と与えられたのが石榴の実。まるで食べ物と思えないような赤色が毒々しく、妖怪の百鬼の目玉のようにも見えた。

マタニティブルー焚火に手を翳し 小林 奈穂

マタニティブルーとは、妊娠中から産後の期間にかけて精神状態が不安定になってしまうことを言う。普通であれば出産という人生の大きな仕事を控えて幸せの気分になれるのであるが、気分が沈んでしまったり悲しくなったり、いわゆる軽いうつ状態になることだそうだ。「無事に産めるのかな」「育児はちゃんと出来るのかしら」など不安な思いを抱きつつ焚火に手をかざしていた。

十三夜全島石油備蓄基地 くらたけん

だいぶ前に川崎にある扇島という人工島に行ったことがある。ここは全域私有地であり、高速道路を除いて一般人の立ち入りはできず、海底トンネルで行き来する。国が石油備蓄基地に指定している所でもある。この句を読んでもすぐさまこの扇島を思い出した。何か人間の息が通っていない不気味さを感じるどころで、冴え冴えとした十三夜の夜の冷気に照らし出された石油基地の寂しさが描かれている。

(以下略)